慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヨセフ・ デイーツゲンの社会主義唯物論
Sub Title	
Author	上原, 好咲
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.10 (1921. 10) ,p.1331(71)- 1340(80)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211001-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

穏健公正

「信用ある時事」の一語本紙の特色を盡くす

切磋の識驗、的確の報道に加ふるに豐富の趣味を以てし男子も婦人も必讀の大新聞なり

時事新報

朝刊八頁
夕刊四頁

特別附録 四頁

木紙四頁大三頁は樂天氏獨特の彩色漫畫、二頁は優艷の寫眞を滿載時事新報月極購者に配布

大阪時事新報

朝刊八頁
夕刊四頁

近時紙面の刷新活躍特に著しく驚く可き購者の增加は西部新聞界に一大氣彩を放てり

「時事の分身」なる一語本紙の眞價を說明す

東京 時事新報社 ● 大阪 大阪時事新報社

定價各壹ヶ月（前）壹圓貳拾錢 ● 六ヶ月六圓八拾錢 ● 壹ヶ年拾參圓貳拾錢 ● 郵稅各（月極め）一ヶ月本邦支那拾錢諸外國八錢

雜錄

ヨセフ・ディーツゲンの社會主義唯物論

上原好咲

一

一八七二年の海牙國際勞働會議の席上でカール・マルクスはヨセフ・ディーツゲンを紹介して曰く、「玆に吾が黨の哲學者あり」と。ライプニッツの一小邑に於ける一革職として一家の哲學的識見を有つまでにはディーツゲンは無論多くの思想上の糧を要求したが殊にデカルト及スピノザの唯心論的世界觀が唯物論的の彼の哲學に取つて寧ろ不思議な位までに重要な資料になつて居る。カント及ヘーゲルが更に大なる營養分になつて居ること言ふまでもない。併し彼の最終の據り處はマルクス及エンゲルスの唯物史觀であつた。彼は謂ふ。一八四八年は予に取つて重大な意義を有つ、即ち同年に於ける反動論者憲法論者、民主々義者、社會主義者の言動は予の若い心に眞善正に就て絶對的根本的の確固たる見地を得んとする熾烈な欲求を喚起した。當時神や敎會に何等の權威も意義も認めなかつた予に取つては此欲求は遺る瀨ない精神上の煩悶とならざるを得なかつたが、其の間の哲學的探求の途上遇々フォイエルバッハに遭逢するに及んで予は甚だ得る處があつた（以上意譯　筆者）。そして更に予の渴を醫してくれたものは一八四九年コロンに於ける共產黨員の處刑に際して、新聞に現はれた『共產黨宣言』であつた。併し畢

竟予の最も負ふ處の多かつたものは一八五九年に公刊されたマルクスの『經濟學批判』で、其の序文に次の如く書かれてあつた――人間が其の日常の麵麭を得る方法又は時代が其の上に運行する文化の水準は、其の時代が眞正善、神自由不滅、哲學政治法律を認識する又せねばならぬ精神的立脚地或は方式を決定すると」。(1) 乃ちディーツゲンはマルクスの「經濟學批判」に、更に局限を許せば其の例の序文に最も負ふ處があつたと謂ふのであるが、マルクスの哲學は今日一般に主として一八四五年に著された例の十一個條より成るフォイエルバッハ批評論（エンゲルスのフォイエルバッハ論附錄）に認められるとされて居るのであるから、ディーツゲンとてもマルクスから得た哲學的影響としては恐らく彼の哲學外緣に過ぎなかつたであらう。從つて若し彼が唯物史觀に何等かの哲學的根據を與へたとすれば其れは彼の獨創と、マルクス、エンゲルス以外の謂はば專門的哲學者例へばスピノザ、カントなどの影響とに依るものであらう。兎に角彼は唯物史觀を自己のものとし是を社會主義唯物論（Social-Democratic Materialism）(2) と呼んだ。曰く「精神を以て視聽觸感に上る現象其の他一切の現象を創造する形而上學的原始實體（primus）とすることを畢竟能めない獨逸觀念論の迷妄の究明は必然的に社會主義唯物論を誘起する。後者に『社會主義』なる語の冠せられる所以は、物質即ち人類社會の經濟的條件は、其の上に立つ法律上及政治上の上層構造並に哲學宗教其の他の思惟形態の各歷史的時代に於ける最後の說明となる處の基礎を形成する、といふ事を最初に明確に宣言したものが社會主義者たるマルクス及エンゲルスだからである。從來は人類の存在を其の意識から說明したものであるが、今は全く反對に人類の存在即ち經濟的立場即ち麵麭を得る方法及方式から其の意識が說明される」。(3) 斯く謂ふディーツゲンはエンゲルス及マルクスの言說を殆ど逐字的に踏襲して居るが、彼は之を如何に哲學的に展開して行つたか。具體的に言へばマルクスが充分な哲學的闡明を欠いたが爲に「人間の存在から其の意識が說明される」（ディーツゲン）換言すれば「人間の存在が其の意識を決定する」（マルクス）ことに就て、其間の關係即ち其れが「因果關係」であるか「條件の關係」か「平行關係」かが不明となり、其處に生ずる唯物史觀批判上の最も量大な爭點に對して、ディーツゲンは如何なる光明を與へるものであるか。私は玆に彼の哲學を乃至其れに依つて唯物史觀を批評しやうとするものではない、唯彼の所說其の儘の紹介に出來る限り誤の少いことを期する丈けに本稿の使命を終せたいと思ふ。(4)

二

先づディーツゲンの辯證的世界觀に依ると反對、相對、混合多種等の合一體が世界であつて、世界即自然、自然即唯一實在即絕對眞理である。世界或は絕對眞理は其れ自身としての性質を具有せず唯總合體的性質を有するのみである。乃ち开は形而上的のものでもなく又形而下的のものでもない、二者の一つではなくて兩者を包容するものである。开は永久無限常住普遍の物其れ自體であるそして其の顯現が自ら宇宙を構成する、そこで宇宙とは經驗され得る凡ゆる相樣變形、種類の物質的並に精神的現象の相互關係の謂で、個々の現象は總て一時的、有限的、活動的、相對的眞理である。而かも宇宙或は絕對眞理は其の有限的現象則ち相對眞理と同一物であること、恰も「森の其處に生ずる樹木に於け

る」が如くである。絶對眞理と相對眞理宇宙と個々の現象、一帶の森林に就ての其の森林と樹木との區別は吾人の觀全上の區別に過ぎないので、實在は一個の全存在（All-Existence）に歸一される。宇宙なくして個々的現象はないと共に、個別的現象なくして宇宙は在り得ない。そして吾人の認識し得るものは相對的眞理或は個別的現象で、絶對眞理或は自然其れ自體は是を直接に認識することは出來ず、唯其の顯現、現象を通じて知り得るのみである。然らば現象の背後に絶對眞理、總合體的自然が存在するといふ事を吾人は如何にして知るか、此知識は何處より來るか。私はディーツゲンに依りて是に答へる前に今少しく彼の形而上學上の立場を明かにせねばなるまい。曰く「絶對眞理は總合體的眞理に外ならないが开は精神の中に宿るのではなくて――少くとも他の何處より多く精神中に宿るのではなくて――精神に依つて思念された對象の中に宿る、其の對象は吾人は宇宙と命名する」。(6)「絶對と相對とは超自然的に分離されるものでない、兩者は相錯綜關聯して無數の有限から成る無限を作り、有限は其れ自身の中に無限の性質を含有する」。(6)「悟性或は叡知は能動的客觀或は客觀的作用である。开は恰も日光、奔流樹木の長成、岩石の自己分解其の他の自然現象と同樣である。人類の頭腦中に於て意識的或は無意識的に生起する悟性或は思惟は其の材料と同樣に確かな現實在の現象である。此作用を外部的でなく內部的の感覺に依つて覺知するといふ事は、其の知的作用を以て物質的に知覺される性質のものとなすを毫も妨げない。一塊の石片が外部的に知覺されるか內部的に思惟されるかの間の些細な相異は、兩知覺が物質的、自然的、感官知覺的に同種類のものだとするに何等の差閊をも來さない。頭腦の作用が心臟の鼓動と同一の範疇に屬せぬとする理由が何處にあるか」。(7)要するに絶對眞理と世界とは同一體で、其の世界は自然現象の世界即ち物的現象の世界以外の世界でなく、心的現象も亦物的現象の一部に過ぎず、一切の現象は個別的に世界に對し全部と一部の關係を有つが故に其處に超自然的唯心論的精神なるものはないと言ふのである。斯くて彼の哲學は形而上學上には實體一元論となるので、若しスピノザ哲學が唯心論的實體一元論だとすれば、ディーツゲンの社會主義哲學は唯物論的實體一元論と見られる。尙私は以上の彼の所論を更に追求することに依つて認識論上の實在論に到達し得るものである。

三

曰く「現存する物力（matter-force）所謂宇宙若くは實在は神學者及哲學者の頭腦中で神祕化された、蓋し彼等は物質と精神とが同一種源（species）のものだと言ふこと及兩者が相互關係に立脚するといふ事に迷妄であつたが爲である。……吾々社會主義唯物論者に取つては宇宙的物質（cosmic matter）は本質（Substance）であつて精神は放射現象（Incidence）である。經驗し得られる現象が種源（或は原因）であつて知力は其の一種類一形態（或は結果）である。然るに是に反して總ての宗教的哲學的觀念論者は觀念を以て原始的のもの原因的のもの乃至根本的の力とする。彼等に依れば吾人の視たり聽いたり觸知したりするものは知的現象である、何故なれば其處には知力を必要とするからである。社會主義唯物論と雖も一面之を肯定する、併し一方知力の存在と共に又他方に物質の存在を認めねばならぬ。知力思惟意識及認識の存在がなければならぬ。そして此事が根本的主要の事である」。「要

は總ての物を秤量し得べき原子に還元しやうとする舊唯物論に滿足せず」「物なる概念を遙かに擴大して其れを以て」「總ての實在的現象が歸屬すると共に人間の思惟力も其の一部を成す」と。すると同時に、「總ての自然現象を『觀念』或は『知的現象』と稱える觀念論に對して、自然現象は決して物其れ自體ではないが併し其れは吾人の感覺に對する對象であると言ふにある。主觀的感情乃ち靈魂或は良心（理性又は悟性）と唱えられる特殊の現象も亦吾人の感覺の對象であるから、事物を主觀と客觀とに區別する必要がない、客觀的事物は唯主觀的にのみ知覺され得ると同時に又其の反對が言へる。兩者は共に存在し共に同一種類の物である。換言すると物體と靈魂とは同樣に經驗される物質である」。[8] 私は茲で最後の問題即ち認識の起源に關する彼の所說に移るが、其の前に認識の限界に就て彼の言を聞く。

曰く「恰も松の木が植物たるの有限的性質を有すると共に總合體的自然の無限的性質を併有する如く、人類の知力も亦一面限られた特殊物質たるの性質を有つと同時に、宇宙の一部としての普遍的な性質を有つ。無限的普遍的宇宙的自然性は…凡ゆる物の中に發見される而て凡ゆる物が自然の中に發見される——悟性或は認識も亦決して例外にはならない」。[9]「悟性は他の諸種の力の間に介在する一個の力であるが、凡ゆる物は他の物と共に存在する時相互に制限されねばならぬ。吾人は凡ゆる物を理解することが出來るが、其れと同時に凡ゆる物を觸視聽味覺することが出來る、」そして其の他諸般の素質（art）を有つが、「各素質は他の素質を制限する、而かも各素質は其れ自身の圈內では無限の性質を有つ」。[10]

四

偖然らば自然現象の背後、相對眞理の背後に普遍無限絕對の自然があることを如何にして知るか。吾人の視力に限りが有るが如く吾人の知識にも亦制限がある、而かも尙是等の物に就て开が無限の有限的部分だといふことを知る。是等の知識は何處より來るか。答へて曰く「开は本有的に意識と共に與へられた知識である。人の意識とは人類の一部宇宙の一部としての彼の人格性の知識である。知るとは意識內に寫象を——其の寫象が物體の寫象であるとの寫象を形成することで、其れ等は總て即ち物體寫象共に今や其れに發しやがて其れに還るであらう處の一個の一般的母體を有つ（To know is to form pictures in the consciousness that they are pictures of things which all, both the pictures and things, possess a general mother from which they have issued and to which they will return.）」「予が絕對眞理の意識が本有的であり唯一の先天的知識であると言ふ時、更に予の言が此本有的意識の經驗に依つて更に確認されることを感ずる。吾人は宇宙間の凡ゆる終始が單に相對的の終始であり、其の根底には總ての經驗の盡し難い物即ち絕對眞理の橫はることを知る」。併し开は吾人の經驗に因つてである、即ち「吾人に因つて各經驗がカントの所謂總ての經驗を優越する經驗の一部に過ぎないことを知る」。「物的世界の無始無終の意識が本有的だと謂ふだけでは甚だ不充分であつて、更に予は次の一言を附加せねばならぬ、即ち其の本有的意識は起源に於て一個の胚子として與へられたのみであつて、今日あるが如きものとなつたのは其の後の生存競爭上の經驗と性的選擇との結果である」。[11] 私は此最後の一句に彼の認識論上の重大な論點を

見ねばならぬ。彼は舊來の哲學思想の共通の缺陷は歴史の重要義を無視したことだと言ふ。其の意味は人類の認識の其の經驗に依る歴史的進化を無視して居るといふにある。私は更に他の場所に彼の言を取る。曰く「意識は其れ自身に於て無限の意識である。予が予の存在することを知る時、予は予自身を存在の一部として知るのである。予が他の自然物と共に單なる其の一微分子に過ぎない處の此存在此世界が、無限の世界であらねばならぬと言ふ事は、經驗を經た思惟機關を以て予が存在の概念(conception of being)を分析するまでは予に取つて不明のことである」。(12) 又曰く「批判的認識論は經驗機關其れ自身を經驗として認めねばならぬ」。(13) 乃ち今や「絶對眞理としての宇宙の知識も亦一個の經驗され得る知識であり、他の諸般の知識及凡ゆる他の事物と同樣に一胚子として先天的に與へられて居る、そして开は無限の中に根源を有つ。故に普遍的眞理と自然現象との關係を既に明瞭に意識して居る人類の精神(mind)は最早經驗に依つて得られた知識と本有的知能認識力其の他とを特に引き放さぬであらう」。(14) 斯く彼は本有意識なるものを認むるに拘らず經驗論を取つて居る。

以上私は既に多くの紙面を費したと思はれるのに尙不備の感に堪えない。併し若し不備乍デイーツゲンの實在論と經驗論との結合を明かにし得たとしたら——舊來の觀念論と經驗論、實在論と唯理論の結合を破つて、觀念論と唯理論とを結合したカントに對抗して、デイーツゲンが實在論と經驗論とを結合したことを明かにし得たとしたら、私は又一面充分であるやうにも思はれる。蓋し斯くして彼の唯物論は徹底されることになるからである。そこで私は彼の「唯物論對唯物論」中の次の言を以て本稿を終る。曰く「社會主義唯物論が以て物質(matter)となすものは計量し得べき物乃至觸感し得べき物に限るのでなく、全存在(the whole real existence)である。宇宙(Universe)に包含される凡ゆる物——そして凡ゆる物が宇宙に包含されて居る、又全部(the All)と宇宙とは一物の二個の名目である——其の凡ゆる物を社會主義唯物論は一個の概念一個の名目一個の範疇に包容し、其れを活動、實在、自然或は物質と唱える」。(15) そして斯く「吾人社會主義唯物論者は物質と精神との相關的一概念をのみ有つが故に、所謂精神的關係たる政治、宗教道德も亦吾人は是を物質的條件とする、そして吾人の動物的要素は人間的要素に時間の點に於て先行するが故に、吾人は物質的勞働及パンとバタの問題を以て總ての精神的發達の基礎とする」。(16)

(註一) "The absolute truth and its Natural Manifestation" in Dietzgen's Philosophical Essays (p. 279)

(註二) Social Democracy なる語を以てディーツゲンは廣義に Socialism を意味す——Ibid. p. 90 脚註。

(註三) Ibid. p. 300, "Materialism versus Materialism."

(註四) 但し本稿はカー會社の英譯本でディーツゲンの殆ど全集である 'Philosophical Essays' 及 'Positive Outcome of Philosophy' の兩册に據つたもので、原書は手に入らなかつた爲是を參考にすること出來なかつたことを斷つて置く。

(註五) op. cit. Philosophical Essays p. 288, "The Absolute Truth."

(註六) Ibid. p. 289

(註七) The Positive Outcome of Philosophy p. 377, "Understanding is Material."

(註八) op. cit. Philosophical Essays P. 220 ff., "Social-Democratic Philosophy."

(註九) op. cit. The Positive Outcome. p. 341, "The Power of Cognition is kin to the Universe."

(註十) Ibid. p. 343, "As to how the Intellect is limited and unlimited."

(註十一) op. cit. Philo. Ess. p. 284 f., "The Absolute Truth."

（註十二）op. cit. Positive Outcome. p. 364, "Consciousness is endowed with the Faculty of Knowing as well as with the Feeling of the Universality of all Nature."
（註十三）op. cit. Philo. Ess. p. 357, "The Light of Cognition."
（註十四）Ibid. p. 285, "The Absolute Truth."
（註十五）Ibid. p. 300, "Materialism versus Materialism."
（註十六）Ibid. p. 301 f.

——十・九・九——

社會思想家としてのウヰリアム・モリス（四）

加田哲二

九

藝術的創作に忙しい Morris は政治上社會上の問題に關しては寧ろ無關心であつた。彼は政治上においては自由主義者であつたけれども、それは受動的であつたに過ぎない。乍然彼の社會問題に對する無關心は、彼にとつて自然のものではない。彼はその胸に深く社會主義的精神を藏してゐた。彼のこれまでに爲し遂げた多くのことはこの精神の體現であつた。けれども彼が社會主義的精神を實際運動としたのは、二つの事柄が、その機緣をなしてゐる。「古代建築保護協會」the Society for the Protection of Ancient Buildings と「東方問題同志會」the Eastern Question Association とに關係したことが、これである。

古代建築保護協會は永い歷史を持つてゐる。さうしてそれは、幾多の英國の鄕土藝術を、その破壞から救つたのである。東方問題同志會は當時の政治的問題の急に應ずるために組織されたもので、その目的が成就せられると共に解散した。古代建築保護協會の事業から出發して、彼は藝術の原理を講演することを始め、さうして工匠の組合（ギルド）の組織者となり指導者となつた。東方問題同志會は彼をして社會主義へ改宗せしめた第一歩であつた。藝術的社會主義者である Morris に對しては、この二つの團體との交渉は甚だ意義がある。英國における貴重な古代の建築は、是迄に數限りなく破壞せられ、または醜惡な修復が施された。藝術好愛家は當事者の無見識を憤つた。けれども團體的勢力を持つてゐない個人の抗議は何等の反響を惹き起さなかつた。Morris が古代建築の破壞を防衛し、之に抗議すべき團體の必要を感じたのは千八百七十六年の秋のことであつた。彼は Lichfield Cathedral の修復のことを聞き、また千八百七十七年の三月には、Tewkesbury の Abbey Church が正に着手されんとすることを耳にした。當時 F. G. Stephens は屢々新聞紙 Athenæum において古代建築保護のことについて論じた。Morris は三月五日にこの新聞紙に一文を送つて、古代建築の保護を主張し、其の無謀な破壞と修復とに對して抗議すべき一團體の存在の必要なることを提議した。

反響は直ちにあつた。Morris がこの書翰を發表してから一ヶ月足らずで、古代建築保護協會は設立され、彼はその祕書となつた。彼は、協會の古代建築に對する態度を表明する趣旨書を書いた。

「最近の五十年間において、他の感情と同じやうに、古代藝術の紀念物に對する新しい興味が起つた。さうして、そは宗教的、歷史的藝術的研究の最も興味ある對象となり、それ等の熱情の的となつた。このことは勿論現代の利益である。乍然、吾々は、もしも現在の是等のものに對する取扱方が尙ほ存續するならば、吾々の子孫は、是等のものが研究のた